

農と福祉の連携による豊かな農山村の創出

農林生産学科 准教授

山岸 主門

目的

近年、福祉分野においては、農業・園芸活動を通じて得られる心身のリハビリテーション効果や、共同作業による社会参加促進効果が改めて評価されている。また、健康づくりや生きがい目的として農作業に取り組む高齢者や、職業として農業分野に就労する障がい者、そして食農教育を通じて生きものの命を学ぶ幼稚園・小学校の子どもたちも増えてきており、このようないわゆる社会的弱者の割合が比較的高い中山間地域においてその傾向は今後、さらに高まるものと予想される。農業生産科学部門では、高齢者や親子等を主な対象とした公開講座（生涯教育・食農教育活動など）を過去10数年実施し、H26年度以降も引き続き部門の重点活動として継続する予定である。またH24年度から神西砂丘農場で障がい者の雇用を始め、H26年4月から二人目の障がい者雇用を本庄総合農場で開始した。

そこで一年目となる26年度は、農と福祉の連携をさらに進めていくため、全国の大学農場や島根県内の施設・企業等での障がい者雇用の現状を調べ、さらに高齢者・子どもたちがどのように農と関わりを持ち、そのメリットやデメリットはどこにあるのか把握することを目的とした。

研究成果

◇全国大学附属農場協議会のネットワークを利用して実施した大学農場における障がい者雇用について調査結果を分析し、「受け入れ体制の整備の必要性」は雇用校44%、未雇用校75%が指摘し、「対応・指導方法の工夫」や「大学全体での検討の必要性」に対する回答割合も高いことがわかった(表1)。

◇人間・植物関係学会大会シンポジウム「ユニバーサル農業の展望と課題」(宇都宮市)や障害者職業生

活相談員資格認定講習(松江市)への参加、また農業生産法人(株)「桃源」(出雲市)等への見学の中で、障害者雇用の理念と現状、雇用管理上の留意点、障害別にみた特徴と雇用上の配慮等について学んだ。その結果、農業分野は他産業に比べ、障がいのある人の個性が活かせるような様々な仕事の内容・場・役割を設けることにより、働きやすい職場となる可能性と潜在能力が高い産業であることが確認できた。

◇農業生産科学部門で働く障がい者の日常観察・聞き取り等の結果、①現状でできる作業、②現状ではできないが工夫・環境整備次第で可能性の高い作業、③今後も難しい作業に分類し、とくに②について作物・作業ごとに整理することができた(表2)。

表1 障がい者雇用のメリットと課題等

メリット	労働力 法定雇用率に貢献 社会貢献 障がい者理解 良きパートナー	雇用してい	雇用してい
		る大学	ない大学
		22%	15%
		22%	0%
		22%	15%
		22%	10%
		11%	0%
課題等	受け入れ体制(指導員の配置等)	44%	75%
	対応・指導方法の工夫	44%	15%
	大学全体での検討が必要	44%	25%
	仕事内容の整理・創出	22%	25%
	機械使用など安全面で不安	11%	25%
	施設・設備等の準備	11%	10%
	その他	11%	5%

※回答があった大学のうち自由記述の書かれていた大学数(雇用9校、未雇用20校)をそれぞれ分母にして割合を算出した。

表2 現状ではできないが工夫・環境整備次第で可能性の高い作業(島根大学農業生産科学部門)

作物	主な作業
サツマイモ等	機械操作: 培土(管理機)、運搬(運搬車)
水耕トマト	液肥作成、誘引、トーン散布、摘果、選果
ハクサイ	収穫
ブルーベリー	鉢替え、用土ポット入れ、収穫、粗皮はぎ
花木類	苗・鉢物等の除草・施肥
ジャム加工	レッテル貼り(キャップ付け含む)

社会への貢献

障がい者や高齢者、子どもたちが働き、体験し、学ぶ仕組みを整備することにより、農山村地域のすべての住民にとっても快適で効率的な、ユニバーサルな環境・システムが生まれることが考えられた。

◇福祉施設・公共団体への貢献：社会福祉法人「さくらの家」（松江市），NPO 法人河南はつらつセンター（出雲市），西長江公民館（松江市），道の駅頓原・冒険の森とんぼら（飯南市）等に出向し，障がい者や高齢者が働きやすい作業環境の提案やブルーベリー等の栽培指導を行った。

◇特別支援学校への貢献：松江養護学校高等部（安来分室），松江緑が丘養護学校および松江清心養護学校小学部の農業・園芸活動のサポートを行った。

◇幼稚園・小学校への貢献：川津幼稚園や川津小学校，島大教育学部附属学校園の園芸活動・クラブ活動に定期的に出向し，園庭・校庭の既存の樹木や自生雑草を活用した園芸活動の進め方を提案した。

◇高齢者等への貢献：島大公開講座・開放事業として，農業生産科学部門等を中心に，「旬の果実でジャムづくり」「やさしいサツマイモ栽培」「サツマイモ・ダイコンを育てよう」「初めての蕎麦作り」「親子で遊力と農力を楽しく結ぶ」「ミニ学術植物園みよりの小道を活用した学生・地域とともに育ち，歩む大学づくり」の6講座を計35回実施し，延べ約700名/年の参加を得た。

次年度に向けた検討状況

◇農業生産科学部門で働く障がい者を主な対象として，実施可能な作業内容・作目を増やすために必要な道具や指導方法の工夫・環境整備などを明らかにする。その際，日誌（作業者）と記録簿（管理者）の統一したフォーマットを作成し，定期的に情報共有するミーティングを設ける予定である。

◇地域内の居場所づくりのため，先進事例の見学や農場を活用した公開講座・大学開放事業を計画する。

◇都市と農山村の共生も視野に入れながら，県内の子ども対象の農山村宿泊体験や福祉農園の開設，空き家・廃校を活用した滞在型交流農園の整備等も調査に含め，これら福祉・教育・観光等と連携するためにふさわしい農（農業）の方法（人や自然と共生した農業，有機農業等）についても検討したい。

公表論文 なし。

学会発表等

1. 山岸主門：地域づくりと農作業学—みんなで一緒に，が合言葉 平成 26 年度日本農作業学会大会（兵庫）
2. 山岸主門・山本匡彦・安田登：大学農場における農福連携の現状把握 平成 26 年度日本農作業学会大会（兵庫）。
3. 山岸主門・井上憲一：農業と福祉の連携の実態と課題 ～大学農場を事例に～ 秋の農場一日開放日_本庄農場（島根）
4. 山岸主門・井上憲一：農業と福祉の連携の実態と課題 ～大学農場を事例に～ 2014 中山間フェア in いいなん（島根）
5. 松本俊輔・山岸主門・城惣吉・籠橋有紀子・巢山弘介・井上憲一：農村を舞台とした数種の学術調査が生産者と消費者に及ぼす影響 平成 26 年度日本有機農業学会大会（島根）
6. 山岸主門・西村昂亮・菅 博嗣：畑のある冒険遊び場で子どもの「遊力」と「農力」を育む - 「草を曲げる・倒す」技（わざ）から考える - 平成 27 年度日本農作業学会大会（千葉）

受賞等 なし。

外部資金 なし。